

書評

宮城征四郎 監修
石原享介, 谷口博之, 藤田次郎 編

呼吸器病レジデントマニュアル (第4版)

近畿大学堺病院呼吸器科

長坂行雄

8年目の改訂で第4版が上梓された。初版以来20年を経て、すでに定評のある本書であるが、第3版から内容も使いやすさも大きく向上した。製本上の改良も見られ、30ページ増えたにもかかわらず冊子の厚さは変わらない。活字も工夫されて情報量も大幅に増えているが読みやすく図表も見やすい。片手に持って親指でページを繰れば見開き右端の表示で速やかに求める項目が見つかり、ペンを持ちながらの参照も簡単である。

内容も格段に充実した。執筆者は医師としても書き手としてもピークを迎えた方たちで気魄に満ちた記述は読んで気持ちがよい。最初の「診断へのアプローチ」の

章は、検査など総論的な項目であるが“臨床現場で知りたい”内容が簡明に記されている。「救急の実際」の章では研修医が大急ぎでページを繰りながら必要な記載と分かりやすい図を見つけてほっとするのが目に見えるようである。

「診断と治療」の章はそれぞれガイドラインを踏まえながら最新かつ、確立した知識がコンパクトにまとめられ、引用文献も厳選されている。概念が大きく変わりつつある「びまん性肺疾患」の項の内容も見事である。「呼吸不全」「睡眠時無呼吸」の章も要点が分かりやすく示されている。「診断書の作成」の章は身体障害などの基準値を探し回ることの多い現場で役に立つ。

本書は便利で有用なマニュアルで、臨床現場での調べ物の時間を大いに短縮するであろう。読者にはここで節約できた時間で、教科書や学生時代に習った生理学、解剖学を参照していただきたい。マニュアルの内容をより深く理解できるようにするし、説明しきれなかった病態にもよりの確に対応できる、医師としての一生の財産となる。

この本には初版の企画から第4版の監修まで、医学教育家としても高名な宮城先生の臨床哲学「臨床医学は万国共通の一般常識の下に取り組まれるべきだ」が貫かれ、「問診および身体所見のとり方」に先生の真摯な臨床への取り組みが示されている。優れた臨床家が総力を挙げて執筆した本書を、ぜひ外国語でも出版して世界に日本の呼吸器臨床の実力と成果を示していただきたいと思う。

〔B6変 頁496 2008年 定価5,985円(本体5,700円+税5%) 医学書院刊〕